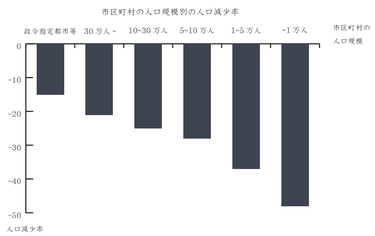
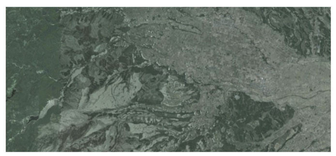
看取る者　～まちの消滅に抗う～

背景：人口減少時代と地方の限界

現在、我が国は急速な人口減少と少子高齢化に直面し、地方各地では活力の低下とともに厳しい財政状況に迫られている。国土全体の低密度化と地域的偏在は今後ますます進行していくことが予想され、この現象は市区町村の人口規模が小さくなるほど深刻さを増す。こうした状況下において郊外に拡散した住宅や店舗に対する行政サービスの負担は大きく、持続可能性という観点からコンパクトなまちへの転換が必要となっている。



対象地：宮城県加美町漆沢地区および漆沢ダム

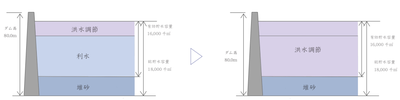


漆沢地区

加美町もこうした人口減少と少子高齢化という現状にさらされているまちのひとつである。漆沢地区は加美町西部の山間に位置し、西小野田小学校漆沢分校が2006年3月に閉校するなど、加美町の中でも少子化が進展している地区である。

漆沢ダム

鳴瀬川水系河川整備計画の変更に伴い、筒砂子ダムの規模拡大にあわせて漆沢ダムの容量再編が検討されている。現在の最も有利な案によると、漆沢ダムは従来の利水機能を放棄し、洪水調節用のみのダムとなることが予定されている。これにより漆沢ダムは平常時水を蓄えることのないダムとなり、ダム建設のために水面下に沈んでしまったかつての地形が川とともに表出する。



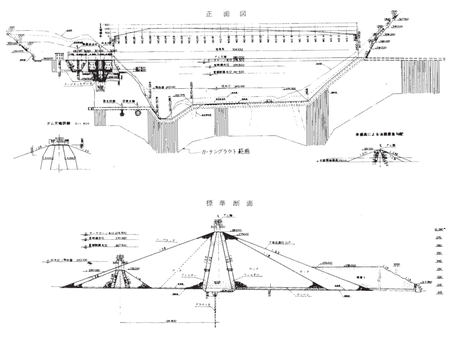
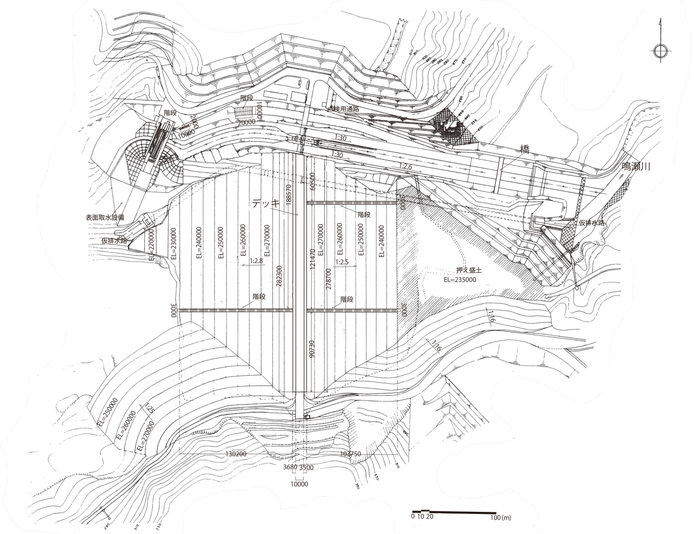
コンセプト：集落の積極的な撤退とダムの遺構化

集落の撤退

“「定住を希望するか・しないか」ではなく「この先、定住が可能か・不可能か」”という観点に立ち、漆沢地区にある集落の撤退を考える。“積極的な撤退”とは、財政の悪化に際する「未来に向けての選択的な撤退」の道であり、過疎集落から考える国土利用再編の戦略でもある。この戦略の時間スケールは最低でも30年から50年、空間スケールは最低でもひとつの市町村もしくは流域とされている。これに則って今回は漆沢地区の住民の移転先を加美町の市街地周辺、期間は漆沢ダムの利水利用が終了するまでの約30年間とする。
移転は集落でのコミュニティーを維持できるようある一定のまとまりをもって行うものとし、また撤退後の集落跡は、人の手が掛からずかつ荒廃した農林地となることを防ぐため一次自然に戻すこととするが、住民は好きなときにそこを訪れることができるようにする。撤退後はインフラの整備を簡略化もしくは撤退を行い、インフラの維持管理費を削減するとともにその地区へのバス路線を廃止する。

ダムの遺構化

利水利用の終了に伴い水門の操作などが不要となるため従来のような管理体制が必要とならないダムとなることから、その最終形態として洪水調節機能は果たしつつも普段は人の手があまりかからないような遺構としていくことを考える。

提案：集落の記憶を遺すダム

かつては一部の集落の風景や思い出の場所を奪った存在であるダムが、自らの利水利用の終了とともに集落の撤退を見守り、撤退後はその記憶に寄り添い遺構となることを提案とする。集落の撤退に伴う廃材をデッキや橋に利用し、集落にあった木や花々をダムのロックフィル部分および盛り土部分に移植することで集落の記憶を留める。利水利用終了に際して、ダムは集落の住民にとっての拠り所となり、観光客には撤退という事実を知るためのきっかけをもたらす。